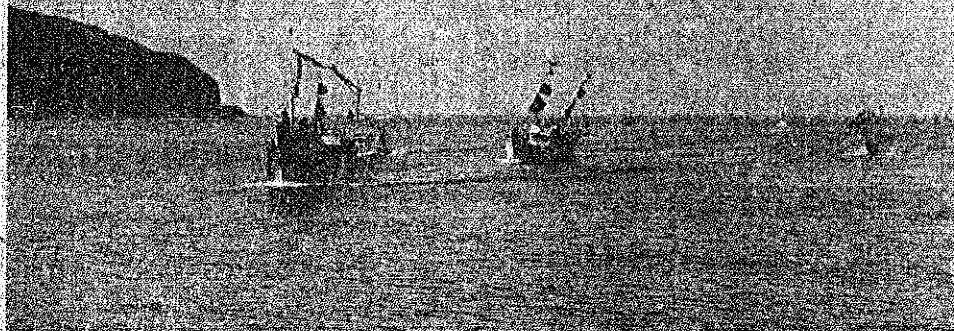


初めての海上渡御



鵜 戸

発行者兼編集者 所
鵜 戸 神 宮 務 所
社 社 務 所
印 刷 所
西 日 本 刷 印 所

去る七月十九、二十日好天に恵まれ、神宮史上初の海上御幸祭が執行された。海の記念日にふさわしく、金銀朱玉の鵜の鳥を織装した御座船

鵜戸神宮御神幸をお迎へして

宮 田 久 真 造

油津漁業協同組合所属の振興丸を始め、満艦飾を施した漁船百余隻が供奉し、鵜戸港より油津港までの十八湊の海上を渡御され、日南市民の奉拝するなか、油津港中央突堤の御旅所へ御泊され、種々の御賑行事が行なわれ、これは日南市民永年の希望であり、御社殿御造営一年目にあたり、又明治百一年の輝しい年にもあたり神宮史並びに日南史の歴史にのこるまことに意義あるものであったことは、各関係者の喜びの声をもち、知る事が出来る。

去る七月一日の湛まつり執行委員会に於て明治百一年を迎える年、明治天皇海上行事に縁りの深い七月二十日の海の記念日に、市民待望の鵜戸神宮海上御神幸の儀が議せられ、市当局と神宮を主体に、奉賛会協賛会両会が全面協力のもと実施することと決議された。鵜戸神宮の海上御神幸は開闢以来のことである。日本三灘の一つと称せられる海上七湊の渡航は安易なものではないが吾等海の業者には暴風浪でないがぎり無謀なことではない。ましてや日頃海上安全豊漁を祈る信御の宮守護神の御神幸である何ぞ恐るるに足らぬ。要は海上供奉参加の隻数にあり、寄進は観光協会を始め関係者の心からなる理解と協賛を得て予算額に達した。供奉船に於ては盛強期であり油津漁協年間の水揚げ六億円その過半は地元漁船の漁獲であり、これが一日休んで供奉は容易ならざるものと思

はれたが、鵜戸神宮は吾等救世の神なり御神幸に供奉して倍増の漁獲を得ん、とは川上漁協長をはじめ組合員の厚い信仰心を以て、大小百余隻の参加が決定した。又海上自衛隊、海の記念日に参加について油津の自衛隊連絡所を通じて十九日十七時入港を十五時頃、鵜戸崎に接近し御神幸船護衛の形態になる様御配慮を乞うと連絡した。油津海上保安部警備船と、あさなぎ警備と通信連絡に備へ、あさなぎ警備の指揮船とし、不肖宮田海運の水先となり海上御神幸の準備はできた。神宮の御旅所は油津中央突堤(新設の魚揚場)に紫地に白菊御紋の大幔幕が張り巡らされ、一切の準備がなされた。又漁協では御旅所の周辺に大輦十数本を置き、協賛の意を表した。若くは一応の威儀が整い、明日を待つばかりになった。愈々当日七月十九日大安吉祥日、天候好晴北東の和風海上は、うねりなく、小波あり、奉賛会、協賛会の役員その他の関係代表數十名神宮祭に参列、定刻に御座船の儀が行はれ、神宮に供奉して八丁坂より国道を經て吹毛井の港に御着、待機中の御座船に御乗船なされ、連発の花火鳴り響き吹毛井港御出発の花迎の満艦飾を施した漁船百余隻お見送りの鵜戸漁協の十数隻、十五時三十分船列を整へ、あさなぎを先頭に御座船供奉船ともに五湊の速力を保ち、整然たる編制で南下進航十六時頃遙か東方海上に艦艇四隻を見る。一列縦隊にて接近し風田沖にて並航し一応護衛の形を取り、御神幸に一段の華が添えられた。十六時三十分連発の花火に迎えられ油津入港外港にて船列を整え、半速にて内港に入る。港内周辺には奉迎の市民数万人歓声の中に御座船は河口西町に接岸、御神幸は御上陸なされ奉迎の市民行列を数回、神興に供奉して代表等数百名、神興に供奉して行列を整え、国道を東へ港大橋を渡り、十七時中央突堤のお旅所に入られ、神事が行はれ、一般参拝が許された。尚、当日は十九時より北九州小倉名物祇園大鼓の乱れ打ち等の神賑があり、二十時より打上げ煙火仕掛煙火の連続で民衆はその都度喝采を挙げ、三十分当日の神賑は終つた。参拝者は夜半まで列をなした。

三十日十三時頃ともなれば御神幸関係者神賑行事関係者陸続として集り、行交にもなれば御旅所周辺は、行交にも不便を感じる人だかり交通整理の係員方は折からの炎天に汗だく見ると、御神幸の様子であった。十四時、(油津港祭の協賛会会長)

れ、御神興は中央突堤より直ちに御乗船連発の花火のこだまする中に、神幸列を整へ市民歓呼の聲に送られて御帰還の途につかれた。

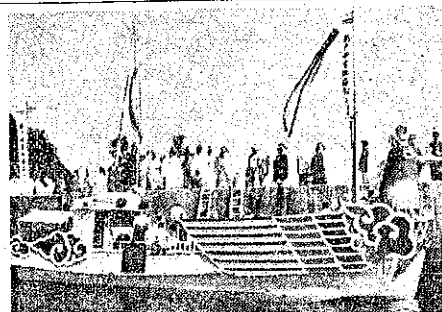
当日の天気は朝方の時化模様、風雨も止んで快晴となったがやや波浪あり小型の船は港口迄お見送りした中型以上五十数隻供奉不肖は御座船に乗船を許されて供奉申上げた。全船とも船力に感じ適宜運航することとし港内にて船列を整え、針路を北東に取り時速七湊の安全速力にて全船主軸を和す。警備艦として御座船の右舷に添うて守護体形をとる。鵜戸崎南々東約半湊にて右転回しつづつ船列を解き自由コースに入る。御神興の御還幸を待つ鵜戸漁協の十数隻港口より先導となり船列を整へて入港、天に鳴り響く連続花火を合同に十五時五十分吹毛井埠頭に御上陸なされた。

埠頭では責任役員の中村氏が役員代表として御出迎へ、その他氏子挙げて無事御帰還を祝福お出迎へ申上げ、鵜戸崎海岸参道を經て十六時半、御本社に御還幸、神事のあと宮司より供奉者又参列者に対し懇ろな謝辞があり、続いて社務所前に於て直会の神酒お祝餅を賜り、まことに主催者としてもこの大任を若くは果し得たよるこびと感激は神宮の御加護もさることながら市民各位の心からなる御協力のお蔭と感謝申し上げる次第で、御神興がお着きになると同時に油然として雨降り神事終了後雨もからりと晴れ涼風が立ち初めたのは御神慮とでも申されようか。

御座船の舵を執りて

原 清

油津港祭りの行事に、鶴戸さ
んが御座船になるとの事を上司
から聞かされ、私の乗船する振
興丸が、御座船として奉仕する
ことに決まったのは六月下旬で
した。現在、木山に住んで居る
母にこの事を話すと大変に喜
び、次の様な話をしてくれま
した。



油津港祭りの御座船

私の父(大正十三年七月死去)
は生前、油津漁協の役員をし
て居りました頃、今の天皇が皇
太子の頃、軍艦出雲、香取、鹿
島の護衛のもとに、海路より鶴
戸神宮御参拜の御り、当時の鶴
戸港は設備も充分でないこと
で、小船で御座船する事になり
て、船中御座船する事になり
て、船中御座船する事になり
て、船中御座船する事になり
て、船中御座船する事になり

が、本船は安定性がある。飾り
物が波で割られるので、船員や
若し連中が補修している。御神
幸の一行を乗せた場合、風向や
船の動揺を御座船し乍ら出港後普
通の二倍近くの時間を掛けて鶴
戸に入る。鶴戸では予かじめ調
査した接岸場所へ繋がるまで
もなく行列の一行が到着する
た。

成され隊艦の護衛のもとに、
南へ南へと下った事を思ひ出
す。昨日は一隻沈み、今日は爆
撃で二隻破壊された。悪夢の様
な一瞬を想ひ出して御座船の
リツチにあった。鶴戸港内に入
左舷に見て、漸く鶴戸港内に入
った。何の支障もなく御座船に
なった。宮司から心からなる感
謝の言葉を受けて帰路につく。
油津に帰ってからは、この大任
を無事終えた安心と緊張が一度
に解け、疲労感だけが残り、
岸壁に繋船し、船員や若し連中
と乾杯したビールの味は又格別
だった。

三笠宮妃殿下の御参拜を仰ぐ

七月には東久邇宮妃殿下も



去る四月二日三笠宮妃百合子殿下、並びに憲仁親王、容子内親王殿下と共に、南九州御旅行バス駐車場より、井戸川日南市

△また七月二十三日夜二時東久邇宮妃殿下には、心の家の団体約八十名と御一緒に御参拜された。



御参拜を仰ぐ

ケネディを狙いしビルの高窓は雲をうつつして、静かなりけり。多情多感英雄閑日月あり

鵜戸神宮の岩窟について

岡田米夫

南方の神宮の成立については、一脈相通するものがある。この考え方を立証されたのは、折口信夫氏の『海神』の研究である。柳田先生は、大分の海岸から鹿尾島の海岸を下られ、更に奄美大島から沖繩に渡られ、一貫して流れる南方信仰に、日本古代の信仰習俗を求められた。折口先生も、これを承けて沖繩の古代信仰を探られ、私共には有益な教訓を残された。私も去る昭和四十年と、本年は三月二十七日から四月七日までの十二日間、沖繩本島だけでなく、本島から台湾までの間に存在する宮古列島から八重山群島にまで足を伸ばして、同島に残る神社信仰を隈なく見聞して来た。

その結果から鵜戸神宮を考えると、その成立には一脈相通するものがあるように思われたので、それについての所感を述べることとする。

第一の感想は、鵜戸神宮が海岸の岩窟のうちに存在することについてである。成る程内地にあつても南では鵜戸神宮が窟内の神社として代表のものとあり、東では神奈川県の島の岩窟内に、現在江島神社がその代表であるが、いづれにしても内地には現在岩窟内の神社といふものは稀であつて、その故にこそ鵜戸神宮は珍らしい神社の例とされ、ここに詣でる人々に珍らしい神社だといふ印象を与えてい

る。然し沖繩に行くと、岩窟内の神社は珍らしくない。元来沖繩は珊瑚礁であるため、島のうちにも随所随所に珊瑚礁の大岩窟があつて、そのうちにも、あつては沖繩といふ状態になつて、それが神社といふものも、それら珊瑚礁の大岩窟のうちから、その前に存在するという形をとつて出来上つてゐる。沖繩で有名な波上宮(元官幣小社)は海岸の大岩壁の上にあつて、琉球八社といはれた識名宮、普天満宮は岩窟のうちにも、亦その前にも祠堂を設けており、白銀堂、金

八丁坂参道と新参道の交叉する処は、古杉等々として空を覆いまことに見事で、古社たる鵜戸神宮の表玄関として、最も其の尊厳を保つてゐる。

聞くところによると、此の表玄関たる一部道路敷二十余坪が駐車場の替地として、日南海岸観光道路建設推進協力会から、特定の人へ譲渡されたとの事ではっきりしてしまつた。

この表玄関たる処に店舗で武宮は共に大岩窟のうちに小祠を設けて拜んでゐる。右は終戦以前からの国家公認神社(無格社以上)の例であるが、未公認の村々の神社のうちにもその例は少なくない。

何故海岸の大岩窟のうちに神社が設けられるのか。沖繩の信仰に話を戻すと、沖繩では神の降臨について、神は高い天(高天原)から山の上に降られ、祭られるのだといふ信仰がある。これを「お岳(ウタキ)信仰」といふ。もう一つは神は海の彼方、特に太陽の上の東の彼方から寄り附かれ拜まれるのだといふ信仰がある。内地でいへば、神が高千穂峰に下られたといふ信仰は前者であり、古典に海を渡り来る神の国として、そこから神が来られ、亦その窟に類する。特に鵜戸神宮の大岩窟が太平洋の東の方に向つて存在すること、太陽(日の神)を失ひ、その上風敷をこわすこととなる。

それもその道路敷は神宮の土地で、新参道をつくる為に、道路敷として協力会が買収したもので、道路敷として使用しない土地は、元の地主に是非譲渡して貰いたいと、鵜戸神宮の表玄関の尊厳維持の為に、この程関係方面へ陳情、請願をした。

この光りを受け、この光りを岩窟に受け入れる信仰があること、沖繩のうちに例が少なくない。沖繩でいへば同本島の南端(知念村)に存する斎場御岳(サイハオタキ)はその東方の海上に存する久高島(クタカ)の上

に、太陽の上るのを窟大岩から拝む信仰を残している。鵜戸神宮の信仰と一脈相通するものがあることを知らしめる。沖繩ではこれは文化財として指定される程有名な所になつてゐる。

更に鵜戸神宮が東方に向つて大岩窟のうちに存する形は、沖繩に例をとると、東方洋上から日神(太陽)の光りを遙拝するところがあり、進んではその日神(太陽)の光りを受けるため、その窟に類する。これを形の上でいへば、この岩窟が天の岩戸をたぐる役目を果たしてゐるともいえることである。鵜戸神宮が日の神の心子孫たる鵜草葺不合尊を奉祀する所とされてゐる。

上には、太陽の上るのを窟大岩から拝む信仰を残している。鵜戸神宮の信仰と一脈相通するものがあることを知らしめる。沖繩ではこれは文化財として指定される程有名な所になつてゐる。

草葺の現社務所は、参集殿或は儀式殿として改修保存し、新たに社務所を造る計画が、かねてから奉賛会の事業として考へられて来たが、今回神宮のお山の目につかない立木の一部を材材として、神宮自体の手で造る見通しがつき、責任役員会の議決によつて、本年四月神社本庁の立木伐採の承認も得て、いよいよ来年の秋に伐採がはじまり、来年の秋には立派な新社務所が出来上る予定。

これは、具体的な信仰としては日神の光(御子神)をここに受け入れるための信仰の名残りがここに見られるのではないだろうか。又鵜戸神宮の相殿中に天照大神神を始めて日向三代の日神の御子孫を奉祀していることと同様の考え方に基づく点があり、ほしくないだろうか。沖繩の岩窟神社の信仰のうち、火の神の祭や、彼の神の祭が存し、その大岩窟を天の岩戸にたとえる信仰が、鵜戸神宮の岩窟内の末社たる火産靈神社、彼戸の九柱神社、門守神社に影をうつしては、ないだろうか。

沖繩は古代日本の祖國だといはれてゐる。その言語は古代の國語をここにどどめ、その信仰風俗のうちには日本古代の姿を充分に残してゐる。その意味では、南九州の古い信仰習俗の原型を見よとするものは、どうして一応は沖繩の神社信仰を見ておかなければ、そのゆがみ、その粗型を窺ふことば出来ない。私は嘗て若いころに鵜戸を

津田祿宜(六十九才)には、大正五年三月当神宮に出生せられてから、五十余年の長きに拂ひ、三意専心、神明奉仕と神徳の宣揚に努力、精勵格勤、上司のよき女房役、部下のよき先達として愛敬せられ、その功績により去る五月神社本庁より、身分三級上を授けられた。

氏は昨冬以来兎角、健康勝れず六月二十六日突如長逝せられたことは、誠に痛惜にたえず致しに謹んで、哀悼の意を表します。



津田祿宜の長逝を悼む

職員の変動

- 一、三月三十日付 津田祿宜 黒木茂一 一身上の都合により退職
- 一、四月一日付 巫子 関原順子 斎女発令
- 一、四月一日付 井上和代、河野博子、巫子見習として採用
- 一、四月十五日付 橋本宜 東正入 檀原神宮橋本宜より転任
- 一、六月二十六日 祿宜、津田益穂 逝去

編集後記

台風シーズン、毎年のことだが自然は恐ろしい、それは体験したものがわからない。四月創刊した「鵜戸」も漸く第二号を発行した編集の苦勞は、それを体験したものしかわからない。台風編集とも回を重ねることに思ひ、早くから準備し、最良の方法で備えようとした。第二号発行に際し、玉稿を賜った諸氏に対し厚くお礼申し上げます。(あづま)